

特集

# 地震災害に備えよう

## 忘れていませんか？あの日の怖さ



宮城県沖地震が起きてから今年でちょうど30年。「災害は忘れたころにやってくる」という言葉のとおり、いつ、わたしたちの登米市に地震などの災害が起こるか分かりません。最近では5月12日、中国四川省で発生した大規模な地震によって多くの死傷者や、甚大な被害が発生しました。「いざ」というとき、自分や家族の命を守り、被害を最小限に食い止めるためには、わたしたちはどう備えればよいのでしょうか。



宮城県沖地震で倒壊した家屋

### 記憶に新しい大規模地震

6月12日は「県民防災の日」です。今から30年前の昭和53年6月12日に発生した宮城県沖地震は、市内に大きな被害をもたらしました。当時の記憶が薄れつつある中、平成15年5月26日の三陸南地震、同年7月26日の宮城県北部連続地震では、地震災害の恐ろしさをあらためて認識させられました。

特に5月26日の午後6時24分ごろに発生した三陸南地震は、気仙沼沖約20km、深さ約70kmを震源地とするマグニチュード7.0、震度6弱というもので、宮城県沖地震とほぼ同じ規模のものでした。この地震では、大きな人的被害はなかったものの配水管の破損、壁の亀裂や一般住宅のブロック塀損壊、墓石の倒

壊など、各地で多くの被害が発生しました。発生した時間帯が夕食の支度時間に重なっていたにもかかわらず、幸いにも火災などの二次災害は発生しませんでした。これは、宮城県沖地震を教訓とした「地震のときは火を消すこと」の防災意識が浸透してきたからだと推測されます。

### 99%以内で99%の確率

本県において、マグニチュード7.5〜8クラスの宮城県沖地震が発生する危険性は多くの機関が指摘しており、その発生確率は10年以内に50%程度、20年以内では90%程度、30年以内に至っては99%といわれています。「今後30年間の発生確率が99%」とは、30年間に発生する確率が99%なのではなく、



宮城県沖地震により崩落した錦桜橋（中田）

発生確率99%という、いつ地震がきてもおかしくない状況に今後30年間ずっとさらされ続けていくということになります。過去に発生した宮城県沖地震の発生状況を見ると、最短期間で26年の間隔で発生したこともありました。昭和53年に発生した宮城県沖地震からすでに30年、大地震は明日に発生してもおかしくない状況にあります。

### 「マグニチュードと地震のエネルギー」

マグニチュードが0.2大きくなると地震のエネルギーは約2倍になります。1大きくなれば約32倍に、2大きくなれば約1000倍になります。単純に地震のエネルギーだけで比較した場合、想定されている宮城県沖地震のエネルギーは、少なくとも三陸南地震の4回分以上に相当することになります。

### 想定される宮城県沖地震とは

宮城県沖では、太平洋プレートが陸側のプレートの下に沈み込み、陸側のプレートが、そのひずみに耐え切れなくなった時、元に戻ろうとして反発することにより地震が発生しています。この海域の陸地寄りで起き

るのが宮城県沖地震で、想定される地震の規模はマグニチュード7.5前後。また、陸地から離れた日本海溝寄りの海域で発生する地震も想定され、宮城県沖地震がこの海溝寄りで発生する地震と連動すれば、マグニチュード8.0前後の巨大地震が起こり甚大な被害が発生すると予想されています。

再来が予想される宮城県沖地震について、単独型・連動型などタイプ別に県がまとめた「第3次地震被害想定調査」結果によると、単独型・連動型ともに県内のほとんどの地域で震度6弱以上の揺れになると予測。冬期間の午後6時に発生した場合の死者は、単独型で96人、連動型で164人と算出し、死者28人だった昭和53年の地震よりも、はるかに大きな被害を予想しています。